

## 「北守将軍と三人兄弟の医者」改稿考

——将軍像を中心に——

植田信子

### 一

「北守将軍と三人兄弟の医者」は、宮沢賢治の生前の数少ない発表作品の一つである。この作品は、昭和六年七月に発行された雑誌『児童文学』第一冊に掲載されたものである。この『児童文学』は、詩人佐藤一英が創刊したもので、賢治への掲載依頼は詩人石川善助（仙台出身）があいだに入っておこなった。賢治は生前たった二冊だけ、自費出版で、心象スケッチ『春と修羅』と童話集『注文の多い料理店』を刊行したが、石川はそれを読んで感動したという。賢治と一英は直接会うことはなかったが、二人の間には児童文学の現状についての情熱的な書簡のやり取りがあったという。たぶん、賢治には一英の『児童文学』の発刊趣旨は伝わっていたであろう。

では、佐藤一英はこの『児童文学』の創刊に際してどのような抱負を抱いていたのか、ここで簡単に触れておきたい。佐藤一英は一般的には詩人として認められていた人物で、児童文学者ではなかった。しかし、児童用の古典解釈の仕事を引き受けたことがきっかけとなり、当時の児童文学の現状を知りそれを嘆き、彼自身で雑誌を創刊することになる。その当時のことを後に彼自身、次のように語っている。

児童図書の仕事は当時のこの方面の出版物に対しても鋭く批判の眼を向けさせることになった。私は詩的精神の昂揚を思った。一切を放棄し、全体を建て直すこと。この一還の仕事として「児童文学」の出版を考へ、古典物語をだした本屋に話したところ、編輯をひきうけてくれればとのことである。

かうして「児童文学」第一輯は昭和六年七月、創刊号をだした。

（傍線引用者、以下同）

一英は、当時の児童文学の現状を批判せずにいらなかった。そして「詩的精神の昂揚」を感じながら雑誌『児童文学』を刊行する。そこで彼が選んだ執筆者の顔ぶれを見ると、そのほとんどが季刊『誌と詩論』、または詩誌『椎の木』のグループに属する詩人たちだった。つまり一英は、『児童文学』の執筆者として詩人たちを選んだのである。当時はほとんど無名であった賢治だが、この時点では詩人として評価され選ばれたのだった。このことは一英の発刊意欲とともに、刊行趣旨ともつながる創刊号の「編集後記」からもわかる。

今日ジャーナリズムに乗って跳ねてゐる童話を見るに凡そ卑

俗主義的な範囲をいでない。ひるがへつて國語讀本にとり入れられた文學を見るに、これらはもはや兒童文學としての指導的な位置を保つだけの要素を缺いてゐるとより思へない。

(中略)

このやうな童話界の現状は何に由來するか。いろいろな社會的事情があることは勿論だが、先づ兒童を輕蔑することより始つてゐるものと思はれる。兒童には文學的精神が缺けてゐるものだといふ觀念が童話の供給者を支配してゐるとより思はれない。

われわれはかゝる觀念を排撃する。かゝる觀念を根底づけてゐる兒童心理學を輕蔑する。そしてこの輕蔑からわれわれの仕事の第一歩を踏み出す。

\*

純粹童話！

詩的童話！

(中略)

本冊に於て見られるごとく、本誌はこの國の有力な詩人小説家の手になる兒童文學を掲載して行くとともに、最新の外國童話中の優秀なものを、それぞれその國語と文學に通じて居られる詩人小説家諸氏にお願いして翻譯紹介して行くことを特色にしたいと思ふ。

このような熱意を持つて一英は『兒童文學』を創刊させたのである。現在ある兒童文學を否定し、一から建て直し、新しい兒童文學を創る心構えで創めたものであった。この一英の『兒童文學』に対する熱意は、石川善助を通じて、また賢治と一英本人同士の文通から

も賢治に伝わつたであろうことは想像に難くない。

ところで賢治は、その創刊号に掲載する作品として「北守將軍と三人兄弟の医者」を選んだ。結果、その刊行趣旨に沿つたものになつたかどうか。当時の「北守將軍と三人兄弟の医者」に対する評価はほとんど残っていない。ただ、現在、この雑誌『兒童文學』に関しては次のように評価しているものがある。<sup>(3)</sup>

他の作品の多くが一英の意図をはかりかねてか、未成熟の印象をまぬかれないのに比べて、長い習作と絶えざる推敲の蓄積をへた賢治童話が、ここでみごとに花開いたのである。

賢治はそれまでに書き溜めていたであろう数ある作品の中から、なぜこれを選択したのであるうか。この発表雑誌『兒童文學』には、その後刊行された第二冊に「グスコブドリの伝記」を掲載し、第三冊は刊行されなかつたが、そこには「風の又三郎」を載せる予定であつたことが、彼の書簡により明らかになっている。<sup>(4)</sup>

前稿<sup>(5)</sup>では、同じく雑誌『兒童文學』第二冊に掲載された「グスコブドリの伝記」を取り上げ、その改稿問題について論じた。そこで、本稿では、第一冊の掲載作品である「北守將軍と三人兄弟の医者」を取り上げ、発表作に至るまでの経緯、つまり改稿過程を具体的に検証し、この作品の改稿の意味を探ってみようと思う。

二

この作品は、発表形態に至るまでに三回の改稿過程があつたこと

が知られている。それらは、全集にも取り上げられている次の四稿であるが、その各稿を成立したと思われる順番に並べ、私にA B C Dと名称を与えておく。

- ・ A稿：「三人兄弟の医者」と北守将軍」（散文形）大正11年頃
- ・ B稿：「」（題名部分 欠落？）」（韻文形）大正12年頃
- ・ 「創作メモ」（手帳）昭和5～6年
- ・ C稿：「北守将軍と三人兄弟の医者」（初期形）昭和6年
- ・ D稿：「北守将軍と三人兄弟の医者」（発表形）昭和6年7月

A稿は、関鉄三による筆写原稿に賢治の自筆手入がなされたものである。関鉄三とは、大正十年前後に宮沢家で働いていた者であることから、A稿の成立年代は大正十一年頃とされている。右に掲げたように、この作品が誕生した当初は「三人兄弟の医者」と北守将軍」となっており、題名の「北守将軍」と「三人兄弟の医者」が逆転していることは注目すべき点である。

B稿に関しては題名部分が欠落しているため、確かな題名はわからないのが現状である。というのも、現存草稿の一頁一行目が、「二、プランペラポラン将軍」となっており、これはC稿の第二章にあたる部分なのである。草稿一頁の前に題名あるいは前書が書かれた用紙が存在したのかどうかは明らかでない。ところでB稿の成立年代は、大正十二年頃とされているが、これは使用原稿用紙の種類からの判断であると推定される。

C稿は、B稿の冒頭と末尾に鉛筆書きの原稿を付加し、B稿の草稿原稿に鉛筆で推敲し散文形にしたものである。つまり、C稿はB稿の原稿を使用して成り立っているものである。またB稿から

C稿に至る過程において、手帳に書かれた創作メモの存在が明らかになっている。この手帳は「孔雀印手帳」と呼ばれるもので、使用時期は昭和三年から昭和六年くらいまでとされている。ただし、この「北守将軍と三人兄弟の医者」の創作メモが書かれた時期は、手帳の使用状況から見て昭和五～六年頃と推定される。したがって、C稿の成立はこの創作メモより以後で、なおかつD稿より以前、つまり昭和六年七月以前ということになるため、昭和六年前半と見てよいだろう。

以上、作品の成立経過について、これまでの研究史を、全集を基礎にして整理し紹介した。この「北守将軍と三人兄弟の医者」が、どのような経過を辿って完成されてきたかを簡単にまとめれば、A稿B稿が大正十一～十二年頃に書かれ、その後十年近くあたためられ、昭和六年頃にB稿に手を入れてC稿ができ、そしてD稿が完成されて昭和六年七月に発表された。このように「北守将軍と三人兄弟の医者」は、完成稿が発表されるまでにAからDまでの過程を経ている。つまり、三回の改稿を必要とした作品なのである。この改稿の意味は一体何だったのだろうか。改稿過程において、最も重要な意味を持つと思われる変化は何だろうか。

「北守将軍と三人兄弟の医者」の先行研究を見ると、やはり発表形態に至るまでの改稿過程（A稿からD稿への変化）に焦点をあてて、その主題の変遷などを論じているものが多い。例えば、西田直敏氏は「初稿では、将軍の凱旋や、三人兄弟の病院の珍奇な情景そのものがテーマになって」おり、「定稿では、主人公北守将軍の比重が増大して、北守将軍の登仙譚が添えられ、ソンバークユーの人間像の造形がテーマとなっている」とし、「初稿はおもしろい仮空のお話を作ることに目的があり、定稿は一人の人間の生方を描く

ことを目的としている」と読む。また、中村稔氏<sup>7)</sup>も、「発表形への推敲とは、一面では三人兄弟の医者たちのいかがわしさが消えていくことであり、反面、北守将軍の超俗的愚直さという人格を書きこんでいくことであつた」としている。このように、D稿への過程は将軍という一人の人間をいかに完成させていくかという流れであつたと読んでいいのだ。このことは、作者賢治が一つの作品を誕生させ、その中に人物を立ちあげていくとき、その立ちあげ方が稿を重ねるにしたがつて、より鮮明になってきていると言えるだろう。賢治の中における将軍という人物像がより一層リアルになってきているのだ。

以上のような研究史を踏まえて、あらためて考えられる論点は、作品の中における将軍像の変化だと思われる。したがって、この改稿の意味を考えるとときには、作品の構成はもちろんであるが、それ以上に将軍像の変化に焦点を絞って検討してみればよいのではない。将軍像を軸にすることが、変化を捉えやすくして、改稿の意味も見えやすくなると考える。そこで、次章より将軍像を中心に具体的な改稿過程を検討してみようと思う。

### 三

まず、A稿からB稿への改稿過程について見ていきたい。先行研究を見てみると、A稿もB稿も同じものとして扱われ、両作品の改稿についてはほとんど論じられていないのが現実である。浜野卓也氏<sup>8)</sup>は「①②と③④ではタイトルが入れかわっている。主役が『医者』から『将軍』にかわっている。」(①②③④は筆者の言うA B C Dに

あたる)としているし、木村幸雄氏<sup>9)</sup>も「表題からもうかがわれる通り、(A)、(B)においては、『三人兄弟の医者』が主役で、『北守将軍』が脇役である。ところが、(C)、(D)では、逆に『北守将軍』が主人公となり、『三人兄弟の医者』の方が脇役となっている。」としている。両氏とも、A・B稿の題名は「三人兄弟の医者」と北守将軍」であり、主人公は「三人兄弟の医者」とであると結論づけている。

しかし、なぜこのような結論が導き出されるのだろうか。それには、次のような理由があるのだ。前章で確認したように、A・B稿とC・D稿の間には、十年近い歳月が流れていること。そして構成上も、原稿に大幅な加除がなされ、大きな違いを見せている。題名も、A稿は「三人兄弟の医者」と北守将軍」で、B稿も一般的には「三人兄弟の医者」と北守将軍」となっているのに対し、C・D稿では「北守将軍」と三人兄弟の医者」と逆転しているのである。これらの事実には、この作品の改稿問題はA・B稿からC・D稿への改稿として、その側面が大きく取り上げられ論じられる理由があつた。

しかし、ここで問題にしたいのは、B稿をA稿同様「三人兄弟の医者」と北守将軍」として、また主人公は「三人兄弟の医者」とであると、読んでしまつてよいのだろうかということである。多くの論者がA・B稿をほとんど同じ物として扱っている中で、唯一中村氏は「韻文形に改稿された時点ですでに、出世物語としてこれを完結させることを止めていることからみれば、すでに主人公の移動がはじまつていたとみることできる。」と指摘されている。また木村氏は、各稿に詳細に検討を加えながらも「北守将軍の凱旋と三兄弟の医者の活躍とが、同等の比重を占める」と指摘するに留まつている。果たしてA稿からB稿への改稿の意味・意図は何であつたのだろうか

か。ここで、具体的改稿過程を挙げながら、A稿からB稿への改稿の意味、そしてB稿の読みに新たな視点を提示してみたい。

まず、この二作品のあいだで最も顕著な違いといえば、A稿の冒頭と末尾をB稿において削除した点であろう。この削除によりA稿とB稿は構成上大きな違いを見せると同時に、作品中の人物の比重を変え、作品の主題をも変えている。ではここで、A稿とB稿の冒頭と末尾を比較してみよう。A稿の冒頭は「三人兄弟の医者」の紹介から始まる。

#### A稿冒頭

遠くの遠くの、グリッシャムといふ首府に、三人兄弟の医者がありました。（中略）ところが、たうたう、ある日のこと、三人が三人とも、一ぺんに大学士になって、おまけに第一等の名医といふことになりました。それはどう云ふわけかと云ひますとかうです。

冒頭部分の最後には、三人兄弟が名医になれたという出世譚をおわせ、「それはどう云ふわけかと云ひますとかうです」という表現を使って、読者の注意を三人兄弟に向けるように仕掛けている。そして末尾は、次のように締めくくられる。

#### A稿末尾

あとはもうおわかりでせう。  
つぎの日、三人兄弟の医者、ホトランカン、サラバ  
アユウ、それから、ペンクラアネーが、大学士になり、王様の病気のときは、どうか来て見て下さいと

頼まれたのです。

冒頭の「それはどう云ふわけかと云ひますとかうです。」を受ける形で「あとはもうおわかりでせう。」として、三人兄弟の出世を語って終わっている。つまりA稿は三人兄弟の医者出世譚なのである。

では、B稿はどうなっているのだろう。冒頭は、いきなり将軍の登場で始まる。

#### B稿冒頭

ある日の丁度ひるころだった／グレッシャムの町の北の方から／「ピーピーピーピー、ピーピー」／大へんあわれな たくさんの／チャルメラの音が聞えて来た。

そして末尾は、A稿にあった三人兄弟の医者出世譚は一切削除され、将軍の凱旋行進で幕を閉じる構成になっている。

#### B稿末尾

プランペラポラン将軍は／顔をしかめて先頭に立ち／ひとびとの万歳の中を／しづかに馬を泳がせた。

このことからB稿は、A稿の三人兄弟の医者に焦点を置く描き方とは明らかに違っている。このようにA・B両稿の冒頭・末尾を比較してみると、ここには全く質の異なった物語がある。A稿は三人兄弟の出世譚であったが、B稿では将軍の凱旋譚に変化しているということではないだろうか。

次に、將軍の凱旋を強調する部分の描写について検討してみたい。まず、北守將軍の凱旋歌と、町の人々の様子に注目してみよう。ここで見られることは、A稿に比べB稿で「凱旋」という表現が繰り返し用いられていることである。

A稿 どうせとても帰れないと思つてゐたが、／ありがたや、敵がみんな赤痢で死んだ、／して見ればとにかくやつぱり凱旋だよ。

(中略)

死んだ一万人はかなり気の毒だが、／それはいくさに行かなくても死んだらうぜ、／さうして見ると、どうだ、ほめられてもいい、だらう。

「帰つてきた帰つて来た。ありがたい。せがれも無事に相違ない。」「ばんざあい。早く王さまへお知らせしろ。」「門をひらけひらけ、」

B稿

とても帰らないと思つてゐたが／ありがたや敵が残らず腐つて死んだ。／今年の夏はずぶぬ湿気が多かったでな／おまけに腐る病気の種子は／こつちが持つて行つたのだ／さうして見ればどうだやつぱり凱旋だらう。

(中略)

死んだ一万人はかなり気の毒だが／それはいくさに行かなくても死んだらうぜ、／さうして見るとどうだ、やつぱり凱旋だらう。

「万歳 万歳、早く王さまへお知らせしろ。」「帰つてきた 帰つて来た ありがたい。せがれも無事に相違ない。」「門をひらけ ひらけ 北守將軍の凱旋だ。」

(六)

一見すると内容的にはほぼ同じであるため見過ごしてしまいがちであるが、よく注意して見てみると、A稿では一度しか使用されていない「凱旋」という言葉が、B稿では三度も繰り返し使われている。ここには、いかにも將軍の「凱旋」を強調したかったという作者の意図が現われているのではないだろうか。

凱旋を強調するという意味においては、町の人々が將軍を歓迎する描写が、微妙に違つてきていることにも注目したい。町の人々が將軍の凱旋を喜び歓迎している様子が書き加えられている。「北から帰つた軍勢を／大悦びで迎へたのだ。」の中の「大悦びで」という表現の加筆。また「プランペラン將軍が／顔をしかめて軍樂と／歓呼の声とのたゞ中を／一町ばかり馬を泳がせたとき」という場面の加筆も、より町の人々の喜びを強調させている部分だと言えるだろう。

また、將軍の凱旋をより印象づけるために、將軍の労役の重さを表現する細かい言葉が加筆されている。それは、「三十年も北の方の国境の／深い暗い谷の底で／重いつとめを肩に負ひ」や「プランペランは／塞外の砂漠で／三十年馬を下りなかつたために」や「將軍のしらが頭の上に／はげしく霧を注ぎかける。」などで、細かい加筆ではあるが、注意してみればどれも將軍の任務の厳しさを表現するものばかりである。これらの加筆は、やはり將軍像を形成する上で必要なものだったのである。將軍に対する作者のこだわりと見てよいだろう。そして、この加筆がより將軍の凱旋の意味を大

くする効果を持つていると思われる。

最後に、このB稿の題名について考えてみたい。もちろん、ここでもう一度確認しておくが、B稿は正確には題名は存在していない。題名部分が欠落しているため、便宜上A稿の改稿作品であるという事実から、A稿と同じ「三人兄弟の医者」と北守將軍」という題名をつけているのである。全集にも、次のように記されている。

本草稿の冒頭には題がなく、「一、プランペラポラン將軍」という章題がマス目第一行に記されていることから見て、元は現存第一葉の前に題と前書を含む一―二枚の草稿があった可能性も考えられる。

つまり、このB稿には題名があったのかどうか定かではなく、仮にあったのだとしても賢治自身の手によって破棄された可能性もあるということである。しかし、ここでその「題名」について検討を加えたい。つまり、その「題名」に表れる作者の意識を探ってみたいのだ。その手がかりになるのは、B稿を改稿したC稿の題名である。なぜならそれは、C稿の題名をつける時、B稿で描いた作品世界の意識が表れていると考えるからである。

C稿の題名は「北守將軍と三人兄弟の医者」であることは明らかである。しかし、全集の校異にあたってみると、最初から「北守將軍と三人兄弟の医者」となっていたわけではないことがわかる。では、C稿で賢治が最初につけた題名は何だったのかというと、それは「北守將軍の凱旋と三人兄弟の医者」であった。そして、後から「の凱旋」の部分を削除しているのだ。また、『青木大学士の野宿』

草稿第七葉裏面に、作品群メモとして「北守將軍の凱旋」と記されている事実もある。このことは一体何を意味するのだろうか。このメモが書かれた時期やC稿が書かれた時期は、決してB稿が書かれた時期と重なるものではないが、B稿を持ち出しC稿を構想した段階で、賢治の中では、この作品は「北守將軍の凱旋と三人兄弟の医者」だったのである。この時の「北守將軍の凱旋」という概念は、C稿で新たに取り入れられたものではなく、元々B稿にあったものだと考えてよいだろう。このことから、賢治にとってB稿は「北守將軍の凱旋」という意識が強かったと言えるのではないだろうか。

以上、A稿からB稿への改稿過程を分析し、なおかつC稿の題名の校異に注目して、B稿の持つ意味を捉え直してみた。従来言われているように、A稿とB稿を同類のものと見做し、主人公を「三人兄弟の医者」であるとすると読みは、決して納得のいくものではなかった。この改稿過程から見えてくるものは、重い任務を全うしてきた將軍像と、それらを迎える町の人々の歓迎ぶりをより際立たせてきた描写、つまりは將軍の凱旋を強調して描きたかった作者の意図である。B稿を一言で表現するなら、北守將軍の凱旋譚ということになるだろう。

#### 四

次に、C稿への改稿過程について検討してみたい。昭和六年七月発行の雑誌『児童文学』への掲載依頼は果たして昭和五年頃であろいか。書き溜めた数々の作品の中から賢治が選り出したのは「北守

將軍と三人兄弟の医者」であった。かくして、B稿が再度賢治の手にかかり、推敲がなされC稿へと姿を変えてゆく。十年近くの歳月を経て、B稿を手にした賢治はこれを書き換えなくてはならなかった。B稿のまま満足することが出来なかったのだ。賢治の中の必然性が生じたのだ。では、B稿からC稿への改稿過程は一体何を意味するものだったのだろうか。

B稿とC稿を比較してみると、そこにはとても大きな変化が認められる。それは、作品の構成が大幅に改稿されているのだ。簡単に現象面の異同部分を挙げてみると、次の3点が挙げられる。①冒頭の三人兄弟の医者（1）の説明部分の加筆（第一章）、②三人兄弟の医者（2）の荒唐無稽な治療描写の大幅な削除、③末尾の將軍が栄達を辞退し郷里へ籠り静かに姿を消す場面の加筆（最終章）、である。これらのことから、B稿からC稿への改稿を、この作品上もっとも重要な意味を持つ改稿であると多くの論者は捉えている。

二章でも確認したが、西田氏（12）は初稿と定稿、つまりA稿とD稿を比較しながら「初稿では、將軍の凱旋や、三人兄弟の病院の珍奇な情景そのものがテーマになって」おり「定稿では、主人公北守將軍の比重が増大して、北守將軍の登仙譚が添えられ、ソンバユーの人間像の造形がテーマとなっている」としている。この初稿と定稿の変容は、多くはB稿とC稿のあいだに生じた変化である。また、浜野氏（13）は「①②稿の主役『三人の医者』が③稿で『北守將軍』に入れかわり、さらに④稿では三人の医者（3）が、ひとりの『国手』にまで高められ『北守將軍』の辺境三十年の徒勞と無為感を真に理解するにいたっている。」（①②③④は筆者のA B C Dにあたる）として、この作品の改稿過程のポイントは①②と③④の間にあると見ている。しかし、ここで注意したいのが、C稿の評価がほとんどD稿の評価

と重なっているという点である。C稿への改稿と、D稿への改稿の違いが曖昧なままになっているのだ。木村氏（14）にしても、C稿について、「北守將軍の生涯を物語の主軸とする構成が確立され」「主題も、北征の労役に半生をついやしながら、栄達を求めず、隠遁して清浄な死を迎えた北守將軍の、自己犠牲の精神につらぬかれた献身的な生涯と高潔清廉な人格とを物語ることへと変容し、深まっている」と評価しながらも、このC稿を改稿したD稿については「雑誌発表の完成稿として、よりみがきがかけられ、すっきりした仕上がりになっている」と評価するに留まり、C稿・D稿のそれぞれの改稿の意味が論じられているとは言い難い。

しかし、私は、C稿にはC稿の、D稿にはD稿の改稿の意味があると考ええる。C稿には、C稿にしかない功績があり、その功績を踏まえた上でしか出てこなかったD稿の質があると考えるのである。したがって、C稿とD稿の改稿の意味をはっきりさせるために、これまでの研究史に見られなかった論点を付け加えたい。

では、C稿をどう捉えるか。C稿を考える上で、やはり一番大きな意味を持つのが③の將軍像（最終章）の加筆であろう。なぜなら、B稿ではあれほどまでに將軍の凱旋に焦点をあて、その將軍の英雄的描写を強調してきたものが、この末尾の加筆により、それまでの將軍の英雄像の質が異なってしまったからだ。將軍の凱旋譚を描いていたものが、ここで將軍の凱旋譚とは言い難くなってしまったのである。しかし、この作品を仕上げるにあたって、どうしてもこの部分を入れなくてはならなかった作者の意図がここにある。それは、C稿を完成させるために書かれたと推測される、創作メモの内容からも確認できる。創作メモの十五頁中八頁までが最終章に関するものなのである。このことも、作者の最終章へのこだわりが感じられ



る事実ではないか。北辺の守備を任せられ三十年間その責務を全うし、凱旋だと言つて町の人々に歓迎され、王にも認められ労を勞われ、名声を手にするチャンスを与えられたにもかかわらず、敢えてそれを辞退し郷里へ帰る道を選択し、最後は物も食べなくなり、姿を消してしまふ。(傍点筆者) この將軍像を描くことが、この改稿過程での目的だったのである。將軍の自己犠牲的で献身的な生涯、つまり「慢心の戒め」がこの作品のキーワードだったのだと考える。

では、「慢心の戒め」を表現するために、どのような改稿がなされたのか、ここで細部の描写に注目しながら見てみよう。まず、將軍の不遜な態度の削除が行われている次の描写は注目すべき点であろう。

B 稿 そこでグレッシャムの人々よ／北守將軍プランベラポランが帰つたのだ／歓迎してもいい、ではないか。

C 稿 そこでむかしのともだちよ／北守將軍ペーランポーとその軍勢が帰つたのだ／門をあけてもいい、ではないか。

B 稿の「歓迎してもいい、ではないか」などという不遜な態度は影を潜め、C 稿では「門をあけてもいい、ではないか」という謙虚な表現になっている。また、人々に対して「むかしのともだちよ」と自分がみんなの仲間であつたということを強調し、庶民からかけ離れた特別な存在ではないと自覚している將軍像を描こうとしている。このような將軍像への変化は、將軍の馬や兵隊たちに対する気配りの描写からも言える。自分の身近にいて、いつも助けてくれた者た

ちへの、気配りができる將軍へと変わってきている。リンパー病院で倒れてしまった馬についての発言は、B 稿から C 稿への改稿で次のように変わる。

B 稿 「医者さん、どうぞたのみます。／はやくこの馬を診て下さい。／わたしも北の国境で／三十年といふものは／ずるぶん兵隊や人民の／衛生や外科にはつくしました」

C 稿 「おいきみ、わしはとにかくに はやくこの馬をみてくれ給へ。こいつは北の国境で 三十年といふ永い間わしを助けて来たのぢやから。」

B 稿の発言は、自分の功績(医者のような働きをしたこと)と引き換えに馬の診療を乞うものであるが、C 稿のそれは、自分はさておいても馬を診てほしいという気持ち、そしてその馬が自分を助けてくれた存在であつたと自覚している点が、B 稿とは質を異にしている。また、リンパー病院での描写も、B 稿の自分だけが治してもらつて喜び帰る將軍が、C 稿では「こいつはじつにい、ですぢや。兵隊どももみなかうぢや。薬はもつとあられるかな。」と兵隊のことをすぐに考えられる將軍へと書き換えられている。このように、B 稿ではただみんなから祭り上げられた立派な將軍を演じていればよかったものを、C 稿ではそのような不遜な態度を戒め、目線を庶民や兵隊や馬へと合わせようとしたのだ。

この作者の意識は、登場人物の変更にも見て取れる。庶民の中に存在する將軍像を意識した改稿があるのだ。將軍が医者を探すために訊ねる人物が、B 稿では「智識のどろぼうめ」と言つて怒る「学

生」だったが、C稿では智識人ではなく庶民的な「大工」へと変わる。また病院で三人兄弟の医者を補助する人物は、B稿ではすべて「助手」という表現だったものが、C稿では「弟子」であり「一人の男」であり「女の子」へと書き換えられる。(C稿からD稿への改稿になるが、将軍が馬に食べさせるものが「上等の朝鮮人参」から、ただの「塩」に変わっている。)これらの改稿は、庶民的な背景を描き、庶民的色彩を濃いものにして、将軍を少しでも庶民に近づけその中に位置づけようとしたものだろう。

このように、将軍像の不遜な態度をあらため、気配りの出来る人物へと書き換え、庶民的色彩を濃くすることによって、へ慢心の戒めを表現しようとしたのだ。そしてへ慢心の戒めを表現しようとした時、その意識こそが、最終章の将軍の登仙を三人兄弟が否定するというくだりにつながったのだと思われる。将軍が仙人になったと言つて人々が祭り崇めているのを、三人兄弟に「将軍が仙人になったといふことはない。われわれは将軍のおからだをよく知つてゐる。将軍の肺は胃と同じではなかった筈だ。きつとどこかの山の中にお骨があるに相違ない。」と言つて否定させないけなかったのだ。最後の最後まで、神格化を拒否し、特別な存在である将軍像を否定しなくてはいけなかった作者の意図が、このC稿の改稿の大きな意味なのだと考える。

## 五

昭和六年七月、雑誌『児童文学』創刊号に「北守将軍と三人兄弟の医者」が掲載され、作者の手を離れたこの作品が世に出る。この

発表形 of 原稿(清書稿)は現存していない。したがって、発表形つまりD稿の下書稿がC稿とされている。D稿は内容的にはC稿をよりスマートに完成度の高いものに仕上げたという印象で、B稿からC稿への改稿のような大幅な変化は見られない。しかし、発表するにあたっての改稿部分を詳細に見ていくと、C稿で意識していたものとはまた異なる作者の意識が確認できる。では、C稿とは異なるD稿の質とは何なのか。C稿を踏まえて出てきた、いやC稿を踏まえないければ出てこなかったD稿の改稿の意味とは一体何だったのだろうか。

C稿に表現されたへ慢心の戒めは、D稿においても引き続き意識され、形を変えて表現されている。これは、将軍の王に対する言動の変化から見て取ることが出来る。作品の構成上も、C稿では一章分割かれていた「六、北守将軍の参内」が、D稿では削除され内容的にも大幅に縮小されて「七、北守将軍仙人となる」に組み込まれている。改稿するにあたって、参内する将軍の姿は縮小しなくてはいけなかったのだ。へ慢心の戒めの意識を持ち続けた作者は、王に評価されるような将軍像の描写を差し控えたのだろう。ここで、王(権威)に対する将軍の意識が読み取れる場面を比較してみよう。王の使いが将軍が馬から下りられないのを謀反だと勘違いして帰ってしまった後の将軍の様子は次のように描かれる。

C稿 プーランポー将軍は 馬を停めてため息をつき しばらくそれを見送つて涙をぼろぼろこぼしてゐたが 俄かにうしろを振り返り 一寸あごを突き出して 参謀長を呼び寄せた。

C稿の将軍は、王の使いに誤解されたことについて「涙をぼろぼろ

こぼして」嘆き悲しんでいる。そして、その誤解が解けた後の将軍は次のように描写されている。

「王様がすっかりおわかりになりました。将軍のご難儀につきまして おん涙さへ浮かべられ、お出でをお待ちでございます。」そこで、プーランポー将軍は剃りたての顔をかゝやかす。

王が自分のことを理解してくれたことを聞き「顔をかゝやか」して喜んでゐる。

しかし、D稿ではこのような将軍像は出てこない。

D稿 ソン将軍はこれを見て肩をすぼめてため息をつき、しばらくぼんやりしてゐたが、俄かにうしろを振り向いて、軍師の長を呼び寄せた。

王への誤解に対して「ため息をつき」「ぼんやり」はしているが、涙を流して悲しむような大袈裟な感情表現はしていない。そして、誤解が解けたとわかって、C稿のように「顔をかゝやか」して喜ぶ姿は削除されている。王の自分自身に対する評価を気にするような将軍像は影を潜め、毅然とした将軍像へと変化している。

また、王の将軍に対する態度も変化している。この王の態度の変化も、将軍の王に対する変化とあわせ、毅然とした将軍像を、より重厚で威厳を持ち、落ち着きを兼ね備えた人物に変化させる役割を果たしていると思われる。

C稿 「じつに永いこと気の毒だった。これからはもうこゝに

居て、大将たちのまた大将になってくれ。」

(中略)

そこで王様も涙をながし「それはよからう」と仰った。

D稿

「じつに永らくご苦労だった。これからはもうこゝに居て、大将たちの大将として、なほ忠勤をはげんでくれ。」

(中略)

「それでは誰かおまへの代り、大将五人の名を挙げよ。」

このように、王の発言も格調の高いものになっている。将軍に対して「涙をながし」たりするような同情的な態度は消され、ただ淡々と発言する威厳ある王へと変化している。将軍・王ともに人物像を変え、お互いにそれぞれの人格を高めあう相乗効果を持たせている。威厳を持ち格調を高めた将軍は、他人に対する言葉遣いにも気を付くなくてはならない。C稿での「医者はどこだ、どこに居るか医者は。」や「おい、医者、早くおれを見ろ。」などの乱暴な言葉遣いは、D稿では「医者はどこかね。診てもらひたい。」や「ひとつこつちをたのむのぢや。馬から降りられないでなう。」さう将軍はやさしく云った。」という表現に変わり、常識的な人物へと書き換えられている。

そして、この将軍像の重厚さをより印象づけるために、将軍の感情表現の描写を変えた。C稿にある「三十年ぶり笑ひ出した」という表現は、「三十年ぶりにつこりした」という表現に変わり、C稿に度々表現されていた「あわてて」という描写はすべて削除された。しかし、その中で唯一残った「あわてて」という表現がある。それは、次の一節である。「さすが豪気の将軍も、すっかりあわて、赤

くなり」という箇所だ。この「豪気の」という表現は、D稿で新たに加筆された部分である。將軍を形容する唯一の表現である。この改稿に際して、「豪気な」將軍像を描くことを、作者は意識していたのだろう。そして、それはより重厚で威厳を持った將軍像へと変化させていく過程の一側面だったのだ。

C稿で「慢心の戒め」を表現するために、特別な存在であることを否定した將軍像が、D稿ではより重厚で威厳のある「豪気な」將軍像へと書き換えられていった。將軍の人間の成長を完成させたのである。

A稿→B稿→C稿→D稿へと、稿を重ねる度に將軍像は変化していき、最後に人間の成長を完成させて、作者の手を離れた。最後に、この將軍像の変化が顕著に表れていると思われる改稿部分を挙げておく。

A稿 (原稿欠損) で、將軍ははづみを食って、ドタリと馬から落ちました。落ちましたが、それは待ってゐた助手がうまく受けとめて、そつと床の上におろしました。

B稿 するとはかに將軍の／ずぼんは鞍とはなれたので／將軍はひどくはづみを喰つて／どたりと馬から落とされた。／けれどもそれは待ってゐた／助手がすばやく受けとめて／きちんと床の上におろす。

A稿・B稿の將軍は特別な存在として扱われなくてはならなかったから、馬から落ちることなく助手によっておろされたが、

C稿 するとはかに將軍の ずぼんは鞍とはなれたので 將軍はひどくはづみを喰つて どたりと馬から落とされた。

C稿の將軍は特別な存在として扱われることを拒否したため、誰も助けるものではなく、馬から落された。

D稿 たちまち鞍はすばりとはなれ、はづみを食つた將軍は、床にすつと落とされた。ところがさすが將軍だ。いつかきちんと立つてゐる。

そして、D稿の將軍は威厳ある豪気な將軍であるから、馬から落されてもすぐに己の足で立つことが出来たのである。

## 六

以上、発表作品「北守將軍と三人兄弟の医者」の改稿過程を詳細に比較しながら検討を加えてみた。従来言われているA稿からD稿に至る過程での、將軍像の変化や構成上の変化はもちろんのこと、それ以上の、作品にこめられた作者の意図がここにはあった。すなわち、A稿では「三人兄弟の医者」の出世譚を描き、B稿ではそれが「北守將軍」の凱旋譚へと姿を変える。そして雑誌の掲載依頼を受けて、自己犠牲、献身、慢心の戒めを表現するために選ばれたのがB稿の將軍の凱旋譚だった。そして、凱旋した將軍の英雄像を描くことを主とするのではなく、將軍を敢えて特別な存在として位置づけることをやめたC稿が書かれる。D稿に至る過程では、將軍を

より重厚で威厳のある人物にするための推敲がなされ、人間的成長を完成させた。

これらの変化の意味を、多くの論者は、賢治自身の生活史と照らし合わせ、羅須地人協会での挫折からくる人間的・思想的深まりであると読む<sup>15)</sup>。もちろん賢治の挫折は事実であるし、そのように読み取れる要素も十分に持っている。例えばそれは、次の、將軍の王からの榮達を辞退する言葉の改稿過程に読むことができる。

#### C 稿

「何ともありがたい思召でございますがわたくしはもう三十年敵にもあなどられず味方の兵隊たちにも弱味を見せまいと思つて、人の居ない砂漠に出てもどこから敵が見てゐるかと、いつでももりんと胸を張り、眼をみひらいてゐましたために、もう、氣張ることにはあきてしまひ、つかれ切つてしまひました。いはゞわたくしはもう生きてゐるしやれかうべのやうなものでございます。どうかこのまゝ、わたくしの郷里に歸つて百姓をすることを許して下さい。」

#### D 稿

「おことばまことに畏くて、何とお答へいたしてい、か、とみに言葉も出でませぬ。とは云へいまや私は、生きた骨ともいふやうな、役に立たずでございます。砂漠の中に居ました間、どこから敵が見てゐるか、あなどられまいと考へて、いつでももりんと胸を張り、眼を見開いて居りましたのが、いま王様のお前に出て、おほめの詞をいたゞきますと、俄かに眼さへ見えぬやう。背骨も曲つてしまひます。何卒これでお暇を願ひ、郷里に歸りたうご

ざいます。」

C 稿で読み取れるのは、辞退の理由は「氣張ることにあきてしまひ、つかれ切つてしま」つたため、將軍が望むのは「百姓をする」ことである。これは、創作メモに「將軍農に歸る。兵隊らもみな農に歸る。」とあることから、將軍が農業をするために百姓になることを最初から意図していたことが窺われる。この姿は、まるで賢治が羅須地人協会を設立して農民の中へ入つていこうとした姿を彷彿とさせるものではないか。しかし、その將軍の言葉がD 稿では辞退の理由は自分が「役に立たず」であるという謙虚な言葉になり、「百姓をする」と言う言葉は消えて、ただ「暇を願ひ」「郷里に歸りたい」と言わせている。賢治が農村に入つていけなかつた挫折体験が、「百姓をする」などという奢りの表現を消し去ることになったのであり、この変化が思想的な深まりであると読むこともできる。

しかし本稿では、これらの改稿の意味を、賢治の思想に収斂するのではなく、それぞれの改稿の持つ意味を作品によって語らせてみた。今回は、改稿の意味は大きくは將軍像の変化であつたと捉え、將軍像の改稿を中心に見てきた。あわせて「三人兄弟の医者」にも焦点をあてて見てみる必要があるだろう。

賢治晩年の作「北守將軍と三人兄弟の医者」、また雑誌発表作「北守將軍と三人兄弟の医者」でもある。雑誌に発表する過程での賢治の背景はどのようなものだったのだろうか。これまでの拙論とあわせ、雑誌『児童文学』に発表された二作品の周辺にこだわりの今回取り上げた「北守將軍と三人兄弟の医者」を賢治が発表作品として選択した意味など、時代背景も押さえながら検討して、賢治晩年の思想を探つてゆくことを今後の課題としたい。

※本文の引用は『新校本宮澤賢治全集』（筑摩書房）に拠る。

注(1) 保永貞夫「詩精神から生まれる童話を―『児童文学』が目指した

もの―」(二宮市博物館平成八年度春季特別展・宮沢賢治生誕百年  
記念『賢治・志功・一英―「児童文学」を巡る人々―」)

(2) 佐藤一英『児童文学』を出した頃の私」(『日本児童文学』昭41・  
12)

(3) 保永貞夫(前掲書1)

(4) 書簡三七九(昭和六年八月十八日 澤里武治宛)に「それはこの  
頃『童話文学』といふクォーター版の雑誌から再三寄稿を乞ふ  
て来たので既に二回出してあり、次は『風野又三郎』といふある  
谷川の岸の小学校を題材とした百枚ぐらゐるものを書いてゐます  
ので」とある。

(5) 植田信子『グスコブドリの伝記』における改稿の問題」(『名  
古屋女子大学紀要』第四十三号 平9・3)

(6) 西田直敏『北守将軍と三人兄弟の医者』の一考察」(『四次元』  
第十巻第四号 昭33・4)

(7) 中村稔「北守将軍と三人兄弟の医者」(『ユリイカ』青土社 第26  
巻4号 平6・4)

(8) 浜野卓也「宮沢賢治 その文体の変容―新美南吉との比較におい  
て―」(『山口女子大学文学部紀要』第17号 平3)

(9) 木村幸雄「北守将軍と三人兄弟の医者」(『作品論宮沢賢治』双文  
社出版 昭59・7)

(10) 中村稔(前掲書7)

(11) 木村幸雄(前掲書9)

(12) 西田直敏(前掲書6)

(13) 浜野卓也(前掲書8)

(14) 木村幸雄(前掲書9)

(15) 前掲書6・7・8・9 全てにその論点がある。